



↑奈良時代の高僧・行基の作と伝えられている定禅寺本尊の阿弥陀如来。修復を経ているが、像の一部は筑豊地区で最古とも言われている。

手と声をかけるほど藤が応えてくれた

切り倒される寸前で

例年、藤波の下で過ごすひとときを楽しみに、遠方から多くの花見客が訪れる定禅寺（浄土宗）。しかし、今では想像もつきませんが、昭和初期ごろは、特に藤で知られた寺というわけでもなく、わざわざ境内まで上って藤見をする人もいないような、そんな雰囲気だったそうです。

60年以上、定禅寺と藤に関わってきた総代の稲富明さん（弁城・元教育長）は、当時の様子を次のようにふり返りました。「敷地は今ほど広くはなく、藤棚も小さかったけれど、株だけは今以上に立派で



稲富明氏（弁城）
60年以上藤と寺を見守ってきた総代

したよ。昔は資材がないので孟宗竹で藤棚を作っていて、それが毎年のように風で飛ばされるもんだから、その都度の作り替えが大変だね。本当に骨の折れる作業でしたよ。その繰り返しに嫌気がさし



故 大庭達城氏
藤の保護に着手した定禅寺前住職

たくさんの方が寄ってききましたよ。ご本尊にふさわしく本堂も改築しましたが、その時に寄せられた多くの浄財（寄付）は、住職の人望と藤への愛着があったからにほかなりません」と、稲富さんは前住職の面影をしのびました。

霊樹との共鳴

常に棚の整備に追われ、手入れも行き届いてなかった藤ですが、昭和32年、その老木に転機が訪れます。大庭達城氏が住職となり、定禅寺に入ったのです。

「これはたいした藤』『立派なご本尊と藤を粗末にしてはならない』『こんなにあるがたいことはない』って住職が言うもんだからみんなが刺激されて、手入れの仕方を学ぶながら世話をしていきました。心から人をもてなすのが好きな住職でね、たくさんの方が寄ってききましたよ。ご本尊にふさわしく本堂も改築しましたが、その時に寄せられた多くの浄財（寄付）は、住職の人望と藤への愛着があったからにほかなりません」と、稲富さんは前住職の面影をしのびました。



↑大正8年4月の定禅寺「稚児舞奉納」の記念写真。茅葺きの本堂の左側に、藤棚が確認できる。「昔の面影がないほど立派なお寺になったのは前住職のおかげ」と稲富明さん。

藤寺と呼ばれるまでに

やがて、多くの人から注がれた手と愛情が実り、定禅寺の藤は毎年見事な花房を誇るようになります。炭鉱景氣に加え、前住職の人柄もあって、開花時期には境内にあふれんばかりの花見客が集いました。炭鉱隆盛期には、陽が落ちてもお提灯の下で芸者の三味線が響いていたといひます。そしていつしか、定禅寺は「藤寺」の愛称で親しまれるようになりました。かつて時代と共に姿を消そうとしていた大藤。その見とれるほどの紫の美しさは、藤守とも言える人々との出会いに、今もなお応えているかのように映りました。

追憶

藤守の際会 護

五百年以上の時を越え向き合える奇跡。
老樹と人がめぐり会った軌跡。

大樹の叫びが届いたのが、奇跡的に命を取りとめた藤。出会うべき時に会うべくして運命的な際会があった。やがて藤守の差し伸べた手に樹が応えていく。